

小特集 『「アイドルの国」の性暴力』を読む

On *The Idol Nation and Its Sexual Violence* (NAITO Chizuko, 2021)

小田原 琳
ODAWARA Rin

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード

性暴力 「慰安婦」 植民地主義 アイドル 歴史 記憶

Keywords

Sexual violence; Comfort Women; Colonialism; Idol; History; Memory

原稿受理日：2023.2.17.

Quadrante, No.25 (2023), pp.39–40.

本小特集は、2022年2月20日に行われた、内藤千珠子『「アイドルの国」の性暴力』（新曜社、2021年）書評会（WINC（Workshop in Critical Theories）、Gender and Criticism Workshop、東京外国語大学海外事情研究所共催）の記録である。

日本軍による制度的性暴力、「慰安婦」制度をめぐる、とりわけ1990年代以降、実証研究においては膨大な蓄積が作り出され、その実態の解明は相当進んだ。他方、それとは背反するかのように、政治と社会のレベルでは否認と憎悪の言説がいよいよ充満している。

そうした状況に対し、内藤千珠子さんは、2015年には『愛国的無関心——「見えない他者」と物語の暴力』で、その熱狂的な愛国を支えるのは他者に対する深い無関心であることを、小説や映像作品やメディア言説を読み解くことによって、戦慄すべき構造的な欠損として明らかにされた。

新著『「アイドルの国」の性暴力』（新曜社）では、この社会のありようを「アイドル」という極度にジェンダー化された記号から読み解き、帝

國的性暴力に規定された現代日本の歴史と文化を照射されている。この社会のすべての構成員が、不可視化された植民地主義と性暴力の連続性のなかに生きていることをあらためて——あらためて、である。なぜなら私たちはそのことを、どこかでずっとわかっているから——認識することは、重い衝撃であった。

当日は、学術会議任命拒否問題で、学問への政治の介入を批判する姿を拝見することも多かった近現代日本語文学研究の佐藤泉さん（青山学院大学）と、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校で、日本の戦後文学、アジア太平洋戦争をめぐる文学や戦時下の性暴力の表象を研究されているファン・ジュンリャンさんにご報告いただき、著者の内藤さんにリプライをいただいた（司会筆者）。フロアも含めた活発な議論が交わされる書評会となった。

本小特集には、ファンさんによる当日のご報告を踏まえた書評と、それに対する内藤さんの応答を収録している。ファンさんの、構造の基盤に埋め込まれて不可視化された人々への繊細な視線と、それを視ようとす



るとき突きつけられる責任を厳しく問う書評を、内藤さんが受けとめながら、文学の言葉が投げかける未来への可能性——それは、その言葉が語られる現在の可能性でもあるだろう——への信頼を語られている。書評会と本特集の構想をご相談していたとき、内藤さんはつねに「対話的」であることを喚起してくださった。本特集は、当日の会場にあった熱気をもよみがえらせながら、お二人のあいだで交わされた、まさに「対話」である。